

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32648

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18662

研究課題名（和文）音楽の分析的聴取が、幼児・児童のリーディングスキルに及ぼす影響について

研究課題名（英文）Relationship between reading skills and listening to sounds carefully

研究代表者

吉永 早苗（YOSHINAGA, SANAE）

東京家政学院大学・現代生活学部・教授

研究者番号：80200765

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：音楽の分析的聴取（焦点的注意と全体的注意による）の体験は、文章の認知としてのリーディングスキルの獲得を促進するのではないが、本研究ではこの仮説を実証するために、環境音や音の音楽的特性を変化させて使用した課題曲及びリーディングスキルテストを制作し、西日本の小学校2年生約124人を対象とした調査を行った。児童は毎週1回、微細な音の変化や環境音を注意深く聴き、少人数のグループで、その変化を話し合う経験を8回繰り返した。話し合いは活発になされ、音楽聴取プログラムの前後において、リーディングスキルテストの得点の向上が確認された。音を注意深く聴くことは、児童の会話力や読解力に関与することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児・児童を対象とした3回の調査から、音楽の分析的聴取と文章のリーディングスキルの相互作用について明らかになった。また、本音楽聴取プログラムが音楽鑑賞の主体的対話的で深い学びにつながることに加え、「音楽を注意深く分析的に聴取し」、音を確認する作業を通しての「協働作業（ディクトグロス）の中でのピアとの気づきを共有する」体験の積み重ねが、「聞く」「話す」「書く」といった資質・能力に加え、学び向かう力の一助になる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to determine the extent to which elementary school children could increase their reading skills in their first language by collaborating in small groups after carefully listening (analytically and holistically) to sounds. 124 second graders in Western Japan participated in this study, which lasted for eight weeks. The children were divided into small groups and were asked to listen carefully to pre-recorded sounds, which differed slightly every week. After listening to the sounds, the children were asked to recall and discuss what they had listened to. They were encouraged to speak freely in their peer group. Results show that all of the groups actively discussed and then clearly recalled the sounds through interactions with their peers. A newly developed reading skill test indicated an enhancement in their reading skills. Carefully listening to sounds helped children to increase their listening, speaking, and reading skills.

研究分野：音楽教育

キーワード：分析的聴取 リーディングスキル ディクトグロス 音楽聴取プログラム 環境音 幼児・児童

## 1. 研究開始当初の背景

音の氾濫する現代社会において、人は、音を聞かないようにする術を身につけるようになった。この傾向は幼児においても同様で、「多くの音を聞いていても耳をすませて聴いていない」ことが問題視されている。しかしながら筆者は、素朴な音を捉えた幼児の前音楽的な行為に着目し、幼児期の音感受の状況を調査研究する中で、幼児が本来敏感な音感受を有し、人の声や身のまわりの音をしっかりと捉えて表現につなげていることを明らかにしてきた。その一方で、音楽に関しては、それを「よく聴く」という教育活動がほとんど為されていない現状も見えてきた。

そこで、音楽を注意深く聴く教育方法として、「気づき」「仮説検証」「メタ言語」の機能を引き出すディクトグロス(Dictogloss)に着目した。Wajnryb(1989)によって提唱されたディクトグロスは、まとまりのある文章を聞き、書き取った内容のメモを基にペアまたはグループで元の文章を復元するタスクである。複数名が協働して、聴取した音楽の構造(音の高低、強弱、音色、リズム等の変化)を再構築することにより、聴くことへの集中力が向上すると考えられるからである。音やフレーズの変化は、その前後関係を比較することによって気づきとなる。したがって、音楽を構造的に聴取するプロセスは、リーディングにおける文章の論理構造の明確化に影響を及ぼすのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の2点である。

### (1) 音楽の分析的聴取と文章のリーディングスキルの相互作用の解明

音楽とは、意味のある音のまとまりである。アドルノは、音楽学習においては、音楽のゲシュタルト性(=構成要素と全体との間には相互作用が働いていて、両者はお互いを生み、またそれらの交差した形でしか把握され得ない)を重視し、「ごく幼いときから、家庭で、必ずしも常に十分に理解しながらでなくともよいが、無意識の知覚の対象として、論理の明快な曲を聴く」ことを推奨している。論理の明確な曲を聴く経験において、無意識のうち何かが育まれるのであろうか。また近年の発達研究においては、「乳児の言語獲得は音声のイントネーションの知覚に始まる」ことが明らかになっている。5歳後期から小学校低学年の時期は、「分かるように話す」「気をつけて聞く」→「詳しく話す」「注意して聞く」といった発達が著しい。したがって、この時期においては、音・音楽を分析的に意味づけながら聴く体験が、言語獲得だけではなく、文章を理解するリーディングスキルにも影響するようになるのではないかと考えた。そして両者は、お互いのスキルを高め合う相互作用の関係にあるのではないかと考えた。

### (2) ディクトグロスを応用した音楽聴取におけるアクティブラーニングの提案

本研究で音楽の分析的聴取を促すために、ディクトグロスに着目する。ディクトグロスは、近年日本の学校教育においても、「気づき」「仮説検証」「メタ言語」の機能を引き出す教室活動として、英語・日本語教育の分野で注目されている。本研究では、このディクトグロスを、聴取音楽に対する認知内容の言語表現に応用する。

学習者は、聴取する音楽の有する論理性に気づき、提示された断片を組み合わせたり、強弱や音の高低、音色などの音楽的要素をメモに書き込んだりして、協働して提示音楽の復元を試みる。本研究では、ディクトグロスの活動に適応する提示音楽を制作し、その学習プログラムの開発を行う。5歳後期には「伝え合う・相談する」ことが発達段階として求められており、ディクトグロスの手法を用いた音楽聴取のプログラムは、アクティブラーニングとして、学習者に主体的な学びを促すと考えられる。また音楽を媒介としたこのプログラムは、就学期のコミュニケーションや言語発達に困難を抱える子供にとっての療法的支援となる可能性も期待される。

## 3. 研究の方法

本研究では上述の仮説を実証するために、言葉への分析的関心が高まり、自力で話を構成できるようになる年長児から小学校低学年(5歳~8歳)の子どもを対象として、ディクトグロスを応用した音楽の分析的聴取のプログラムを開発し、小学校2年生を対象としたリーディングスキルテストを作成して、その実験的実践を行った。

実験的実践にあたり、幼稚園・小学校教師との検討を重ね、課題曲(提示音)の制作、リーディングスキルテストの作成、ディクトグロスを応用した音楽聴取プログラムの開発検討を繰り返した。具体的には、次の3種類の調査を実施した。

調査1	4種類の環境音の関連付け課題を用いたパイロット調査	2017年
調査2	音楽の分析的聴取が児童のリーディングスキルに及ぼす影響①	2018年
調査3	音楽の分析的聴取が児童のリーディングスキルに及ぼす影響②	2019年

#### 4. 研究成果

##### I 4種類の環境音の関連付け課題を用いたパイロット調査（調査1）

関連する4種類の環境音が順に示される2つの課題（テーマ：「海」「夕方の学校」）を制作した。「海」では、波音（サー、ザー）→海猫の鳴き声→海水浴の子供の声→波と漁船エンジン音が順に示され、「夕方の学校」は、体育館でのボール遊び→チャイム→『ゆうやけこやけ』の音楽放送→カラスの啼き声で構成されており、提示時間はいずれも2分である。

N幼稚園の5歳児24名（男児6人、女児18人）及び、西日本の公立小学校に通う2年生31名（男子14人、女子17人）の協力を得て、提示された課題に関し、その音の種類とその順序、場所や景色等について自由に話し合うことを求め、グループ内（3名～4名）で交わされた会話内容を録音した。

その結果、多くの5歳児に、「時系列でものごとを捉えたり、順序性を考えたりする」ことや「可逆的操作を使って結果から原因に遡って理由づけたり、因果関係を捉えたりする」こと、さらに「予想したりイメージを広げたりして考える」ことが身に付いていることがわかったが、小学校に入りそれは精度を増すことが確認された。7歳児は、4つの環境音を関連付けてその風景をイメージするというよりも、その音の正解だけを答える児童も少なくなかったが、豊かに連想を膨らませて具体的な情景を表現する児童もおり、その差は5歳児よりも大きかった。

課題1は課題2に比べ、直裁にその音風景が想像できる環境音ではなかった。しかしながら、むしろそうした音であったことが、子どもの想像力をかき立て、連想を膨らませ、4つの音の因果関係を探りながらの関連付けにつながったのではないかと考えられる。例えば5歳児の1つのグループでは、始め、海水浴の声に「海で遊んでいる」と答えていたが、波音を聴いてその年に襲来した台風を連想し、その声を「溺れている」と発想し、そのつながりから漁船の音を「地震」「山が崩れる」と答え、その連想は課題2の内容にも及んでいた。一方7歳児の1つのグループでは、当初「海」をテーマに話が始まり、ウミネコの声に「夕日の沈む光景」を想像したりしていたが、船のエンジン音に「車が10台くらい一気にエンジンを鳴らした音」と発想したことを切っ掛けとして、最初の波音が「飛行機」や「たくさんのエンジン」の音に変化した。内田ら（2014）は、「五官を使った直接体験は論理的思考の発達に不可欠」と述べている。本調査では、直接体験における音風景のインプットが、論理的思考を促すディクトグロスによって、未体験な音風景への想像と音の想起をもたらすことが示唆された。

##### II 音楽の分析的聴取が児童のリーディングスキルに及ぼす影響（調査2-①）

短い課題曲を分析的に聴取する体験を重ねることによって、公立小学校2年生のリーディングスキルが、介入後に向上するかどうかを確認することを目的とした。課題曲に施された音響的变化を分析的に聴取し、その変化を小グループ内で情報交換しながら確認（ディクトグロス）する体験すが、児童のリーディングスキルにどのように影響するのか、西日本の公立小学校の2年生3クラス（実験群：31名、統制群：60名）の協力を得て、介入効果の有無を検証した。

課題曲には、児童にとって馴染みのある童謡『ちょうちょう』を使用した。『ちょうちょう』の4フレーズに対し、小学校2年生において既習の音楽の属性（音色・大小・テンポ・高低・調性・奏法）を1回あるいは2回変化させた。リーディングスキルテストには市販されている小学校2年生用『国語読解力全国標準テスト』（受験研究社）の第104番目の課題を使用した。当該課題は「友達の家に行って紙人形を作って遊ぶ文章」を読み、6つの質問に対して7つの回答を要する課題であり、得点は0～7点で評価される。解答時間は、20分（朝学の時間）とした。

8回の課題曲聴取とそのディクトグロスを実施し、さらにその翌週に2回目のリーディングスキルテストを実施し介入効果を評価した。調査においては「曲をよく聴いて、途中で何が変わったのか」を紙に書くよう教示し、「何がどのように変わったのか」を隣の児童と話し合う（ペア学習）活動を経て、6人のグループでの話し合いを行う中で課題曲の変化を言葉で再構成させた。その後、教師による振り返りを行い、課題曲を再聴することで聴取内容の確認を行った。

その結果、介入の有無に関わらず、1回目と2回目のリーディングスキルテスト（標準テスト）の成績分布は正規分布していなかった。これはテストが簡単であったための天井効果の状況であったと考えられる。群（介入の有無）×時間（前後のテスト）による分散分析を行った結果、有意な群の主効果（ $F(1, 89)=5.29, p=0.02$ ）は認められたが、時間の主効果（ $F(1, 89)=0.001, n. s.$ ）および交互作用（ $F(1, 89)=2.48, p=0.12$ ）は有意ではなかったため、介入あり群と介入なし群の間には有意な「介入効果」は認められなかった。

介入の有無による1回目から2回目のリーディングスキルテストの成績変化（プラス変化/マイナス変化）のあった人数を比較した結果、統制群で有意なプラス変化が、また同様に、統制群で有意なマイナス変化が認められた。両群で1回目と2回目のリーディングスキルテストの成績間の関係性（関係の強さ）は異なっていた。したがって、同じ課題であっても、統制群よりも実験群の方が安定的に問題を解いていたと考えられる。反対に統制群は、同質に回答することができなかった。

本調査で実施した短い課題曲を分析的聴取する介入効果は、リーディングスキルテスト（国語読解力全国標準テスト）成績の向上に現れなかったと言わざるを得ないが、テストの回答への安定性に寄与した可能性がある。

### III 音楽の分析的聴取が児童のリーディングスキルに及ぼす影響（調査2-②）

調査①では、「作成した聴取課題の音の変化が単純であったために回数を重ねる中で集中力が低下した」、「使用した小学校2年生用『国語読解力全国標準テスト』の内容が平易であったために天井効果が生じた」ため、聴取課題とリーディングスキルテストの改訂版を作成し、西日本2つの公立小学校2年生を対象とした。1校は小規模校（4名）、もう1校は4クラスのうちの1クラス（29名）の協力を得た。担任及び音楽専科の教師と教頭の協力により、2019年9月～10月の朝学の時間（20分）に実施した。

課題曲は2018年と同様に、児童にとって馴染みのある童謡『ちょうちょう』を使用した。今回は、メロディーに、小学校2年生において既習の音楽の属性（音色、調性、演奏法、高低）を変化させた4課題と、途中から環境音を重ねる課題を制作した。環境音課題では、各課題に対し2種類の音を順に重ね（水音+蛙の鳴き声、水音+子どもの声、風音+鳥の啼き声、風音+雨音）、児童がその音の風景を想像しながら聴取し、ディクトグロスに取り組むことを期待した。

リーディングスキルテストは、2018年の調査終了後に実施したサンプル課題の分析を行い、調査協力校教師の協力を得て、新しいリーディングスキルテストを作成した。内容は、次に挙げる①～③の大問から構成される（20分）。①文章に当てはまるオノマトペを選択する。②ホットケーキ作りの文章と、別枠に示された材料から、調理手順を問う問題に答える。③「くまのプーさん」についての説明文を読み取り、問いに答える。

分析的聴取を行うために、ディクトグロスを応用した音楽聴取プログラムを再検討し、調査協力教師に、「曲をよく聴いて、途中で何が変わったのか」を紙に書くよう児童に指示➡「何がどのように変わったのか」（環境音を含む課題曲については「場所はどこか」）を隣の児童と話し合う➡グループ（6人程度）で話し合い、課題曲の変化を言葉で再構成することを紙面で伝えた。その後、教師による音楽的特徴の変化の確認を行い、課題曲を再聴することで分析的聴取力の向上を図った。8回目の課題曲聴取プログラムが終了後、2回目のリーディングスキルテストを行った。

その結果、項目分析において、事後テストの結果が事前テストの結果よりも高いこと、事前テストグループと事後テストのグループを比べた  $t$  検定の分析結果が、一つの問いにおいて有意な差があることより、事後のテストにプラスの変化があったことが確認された。ただしこの伸びが、音楽聴取プログラムをしていない場合に起こる成熟のためかという疑問については、教育上の配慮から統制群を設けていないため、明確でない。音楽聴取プログラムは約1ヶ月という短い期間であるため、この期間に自然に学んだ成熟の結果とは言い難いが、事前事後テストは同じテストであるため、対象児童が事前テストの後、答えを日常生活の中で探した可能性もある。

また、概ねどの児童においても課題曲に対する気づきの記述量が増加していた。例えば7番目の課題は風と鳥の啼き声であるが、前の週に聞いた水の音に関連して大雨を連想したり、最後の課題の雷鳴から「台風」を連想したりする等、関連付けや連想を膨らませている記述も多くあった。児童の気づきメモを User Local 社の AI テキストマイニングツールを使用して分析した結果、以下のような変容が見られた。（<https://textmining.userlocal.jp/>）

- 音楽聴取プログラムを繰り返すにつれて、形容詞による表現が増える。これは新しい経験の文脈化とともに、そこに感情を加わることで、心象を強くイメージしていることが起こっているものと考えられる。
- 一定の音刺激に対する分析的聴取により、既存の知識に新しい知識が加えられ、スキーマの構造化を行っている。
- 新しい経験の文脈化は、感情を加えることで強化されている。
- 過去に聴取した内容のストーリーを重ねながら、情景の変化を捉えている。
- 過去に感受したイメージの上に知識を重ねながら、そこに感情を重ねることで新たな経験の文脈を形成している。

## 研究のまとめ

本研究では、初年度に4種類の環境音を順に聴取（2分）する課題を制作し、幼児・児童に提示順を再構築すると共にその音から想像される情景の回答を求めるパイロット調査を実施した。

次年度には、児童にとって馴染みのある童謡『ちょうちょう』を使用し、メロディーに、小学校2年生において既習の音楽の属性（音色・大小・調性・演奏法・高低）を変化させた課題を制作し、その変化をペアまたはグループでディクトグロスする調査を実施した。しかしながら、課題内容が児童にとって予測以上に簡易であり、児童は、より変化を求めていることが確認された。

そのため最終年度には、前年度と同様に『ちょうちょう』の曲の途中で音楽の属性を変化させる課題の他に、メロディーに環境音を挿入する課題を制作した。環境音は、水の音+カエルの鳴き声→池のように、抽象的な（それだけでは何の音か、あるいは場所の特定が難しい）音をまず挿入し、その後具体的な場面が特定できるような音を加えることによって、児童の発想がつながり、連想がふくらむような工夫を施した。音楽聴取プログラムの前後において、リーディングスキルテストの得点の向上が確認された。

本調査により、以下のことが明らかになった。

- ① 多くの5歳児に、「時系列でものごと捉えたり、順序性を考えたりする」ことや、「可逆的操作を使って結果から原因に遡って理由づけたり、因果関係を捉えたりする」こと、さらに「予想したりイメージを広げたりして考える」ことが身に付いていること、そして小学校に入り、それは精度を増す。
- ② 直接体験における音風景のインプットは、論理的思考を促すディクトグロスによって、未体験な音風景への想像と音の想起をもたらす。
- ③ 音楽の分析的聴取の経験が、リーディングスキルに影響を及ぼすのではないかということが示唆された。
- ④ 音楽の分析的聴取における「注意深く聴く」経験が日常生活における気づきに影響を及ぼし、ディクトグロスの経験は、状況を表現する言語の豊かさにつながっている。

①～④は、本研究の目的（1）音楽の分析的聴取と文章のリーディングスキルの相互作用の可能性を支持する結果である。一方、目的（2）ディクトグロスを応用した音楽聴取におけるアクティブラーニングの提案に関しては、調査終了後に実施した協力校教師へのインタビューにおいて、「鑑賞の授業での反応が目に見えてよくなった」、「それまでは気づかなかつたであろう変化にも気づくようになった」、「その変化（音色や曲想を含む）を表現しようと言葉にする力も向上している」等の回答が得られた。したがって、本研究における提案が、音楽鑑賞における児童の、主体的対話的で深い学びに貢献することは明白である。

加えて協力校教師からは、「正しい答えを探そうとするのではなく、自分の感じたことに自信をもてる児童が増えた」、「グループ活動で友達の発表を繰り返し聞くことで、自分の考えをもてない児童が自分の言葉で考えを書いたり、感想を書いたりできるようになった」、「様子や状況を詳しく話すことができるようになった」と言った変化があったとの回答も得られた。したがって、本プログラムの「音楽を注意深く分析的に聴取し、音を確認する作業を通しての「協働作業（ディクトグロス）の中でのピアとの気づきを共有する」体験の積み重ねは、「聞く」「話す」「書く」といった資質・能力に加え、学び向かう力の一助になる可能性を示唆するのではないかと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Sachiko Takahashi, Sanae Yoshinaga, Masafumi Komatsu, Akio Shimogoori, Yoichi Sawada, & Shuko Ikeuchi	4. 巻 3-1
2. 論文標題 The relationship between listening to sounds and expanding semantic knowledge	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岡山県立大学教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉永早苗	4. 巻 2019-9
2. 論文標題 「音感受」への意識が育む幼児の「豊かな感性と表現」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 幼児教育じほう	6. 最初と最後の頁 12^18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉永早苗・水崎誠・北野幸子・無藤隆・大矢大	4. 巻 2
2. 論文標題 幼児の音声情報獲得及びその表現の発達と保育環境の関係について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代児童学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Sachiko Takahashi, Sanae Yoshinaga, Masafumi Komatsu, Akio Shimogoori, Yoichi Sawada, & Shuko Ikeuchi	4. 巻 3 - 1
2. 論文標題 he relationship between listening to sounds and expanding semantic knowledge	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岡山県立大学教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 XX-XX
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塚田伸也, 佐々木真史, 森田哲夫, 牛田啓太, 小松正史	4. 巻 44
2. 論文標題 東日本大震災被災地区におけるインタラクティブミュージックシステムの運用	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 交通工学研究発表会論文集	6. 最初と最後の頁 277-282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋幸子	4. 巻 48
2. 論文標題 Comparison between two public universities in first-year students' beliefs about English learning.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語文化学会論集	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松正史	4. 巻 50
2. 論文標題 プラネタリウムの音環境デザイン・プロジェクト (1) -久万高原天体観測館でのアクションリサーチを通して-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 京都精華大学紀要	6. 最初と最後の頁 71-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松正史	4. 巻 51
2. 論文標題 鉄道のサウンドブランディング戦略 (1) 京都丹後鉄道における音環境デザインの実践報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 京都精華大学紀要	6. 最初と最後の頁 87-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 吉永 早苗、高橋 幸子、小松 正史、下郡 啓夫、澤田 陽一
2. 発表標題 音楽の分析的聴取が、幼児・児童のリーディングスキルに及ぼす影響(3)
3. 学会等名 日本発達心理学会 第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sanae Yoshinaga, Sachiko Takahashi, Masafumi Komatsu, Akio Shimogoori, Yoichi Sawada, Shuko Ikeuchi
2. 発表標題 Effect of carefully listening to sounds on children's first language acquisition
3. 学会等名 The 20th PECERA International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉永 早苗、高橋 幸子、小松 正史、下郡 啓夫、澤田 陽一
2. 発表標題 音楽の分析的聴取が幼児・児童のリーディングスキルに及ぼす影響(2) - 小学校2年生を対象とした調査から -
3. 学会等名 日本発達心理学会 第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachiko Takahashi & Sanae Yoshinaga
2. 発表標題 The relationship between listening to sounds and expanding semantic knowledge
3. 学会等名 The 16th Asia TEFL International Conference, The 6th Hong Kong Association for Applied Linguistics Conference, & The 1st Macau Association for Applied Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 吉永早苗
2. 発表標題 幼児期の分析的聴取の状況と発達について - 5歳児と7歳児を対象とした4種類の環境音の聴取とその関連付け課題から -
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小松正史
2. 発表標題 幼児を対象とした音育プログラムの開発(2) ~ 保育園での継続的実践活動を例にして ~
3. 学会等名 日本音響学会2019年春季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小松正史、磯優里菜、北村真梨奈、三田村慶郎
2. 発表標題 学習支援空間の音環境改良プロジェクト ~ 京都精華大学人文学部ラーニング・コモンズでの実践
3. 学会等名 日本音響学会2019年春季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉永 早苗・下郡 啓夫・小松 正史・高橋 幸子・澤田 陽一・池内 修子
2. 発表標題 音楽の分析的聴取が幼児・児童の「リーディング」スキルに及ぼす影響(1) 5歳児における4種類の環境音の関連付け課題を用いたパイロット調査
3. 学会等名 日本発達心理学会 第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小松正史
2. 発表標題 幼児を対象とした音育プログラムの開発 -保育園での実践活動を例にして-
3. 学会等名 日本音響学会2018年春季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋幸子
2. 発表標題 Transition from EAP to ESP among Japanese university students: Does content-based learning sustain learners' motivation to learn English?
3. 学会等名 International Conference on ESP, new technologies and digital learning (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋幸子
2. 発表標題 Japanese University Students' Beliefs about Learning English
3. 学会等名 TESOL 2018 International Convention & English language Expo (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下郡啓夫・吉永早苗・有賀三夏
2. 発表標題 音感受と多重知能理論：環境、人とのコミュニケーションの在り方と創造性
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 石上 浩美（編著）小松正史、吉永早苗他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 嵯峨野書院	5. 総ページ数 157
3. 書名 新・保育と表現 理論と実践をつなぐために	

1. 著者名 小松正史	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ヤマハミュージックメディア	5. 総ページ数 88
3. 書名 毎日耳トレ! ~1ヵ月で集中脳・記憶脳を鍛える~	

1. 著者名 小林 紀子、砂上 史子、刑部 育子（編著）吉永早苗他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 保育内容「表現」	

1. 著者名 吉永早苗他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 光生館	5. 総ページ数 175
3. 書名 保育内容 表現	

1. 著者名 小松正史	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ヤマハミュージックメディア	5. 総ページ数 112
3. 書名 1分で「聞こえ」が変わる耳トレ!	

1. 著者名 無藤隆・吉永早苗他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひかりのくに	5. 総ページ数 128
3. 書名 10の姿プラス5・実践解説書	

1. 著者名 浜口順子・吉永早苗他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 257
3. 書名 事例で学ぶ保育内容 領域 表現	

1. 著者名 無藤隆・吉永早苗他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 246
3. 書名 育てたい子どもの姿とこれからの保育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下郡 啓夫  (Shimogoori Akio)  (00636392)	函館工業高等専門学校・一般系・教授    (50101)	
研究分担者	小松 正史  (Komatsu Masafumi)  (40340509)	京都精華大学・ポピュラーカルチャー学部・教授    (34317)	
研究分担者	高橋 幸子  (Takahashi Sachiko)  (50299244)	姫路大学・看護学部・教授    (34534)	
連携研究者	澤田 陽一  (Sawada Youichi)  (50584265)	岡山県立大学・保健福祉学部・助教    (25301)	